名誉園長の部屋
2018. 9. 18

KYOTO BOTANICAL GARDENS

ながらくさぼっており、すみませんでした。久しぶりの投稿です。

植物園は、生きた植物と格闘の毎日をおくっています。生きた植物を生き続けさせる努力は並大抵ではなく、家庭園芸や趣味園芸の域をはるかに超えています。

久しぶりに投稿しようと思っていた矢先、台風 21 号が襲来しました。

植物園は、自然災害とバトルの連続です。
黎明期のこと、災害のこと、書きとどめておかねば、の責務にかられました。

1　黎明期・第一次近代化と二年連続の自然災害

1913(T2)年、大典記念京都博覧会会場予定地として京都府が購入したこの土地は、経済的理由で博覧会を断念するなど、紆余曲折を経たのち、では植物園をつくろうとなった。

1917(T6)年 4 月 9 日、地鎮祭(写真 1)。当時、完全に洛外であったこの土地に、植物園建設のための資材搬入路として同年、「中賀茂橋」の建設がはじまった。この中賀茂橋、後に述べる京都大洪水で流失したため、昭和 8 年に建設の「北大路橋」とは約 2 年間のみの並立、歴史からほとんど忘れられた存在だが、当時としては珍しい鉄筋コンクリート橋だった。この「中賀茂橋」があったからこその植物園。それ故「中賀茂橋」の存在は、この地域(「北山」が一般的だが、「中賀茂」と称したい)の第一次近代化のスタートの象徴と、私は言っている。

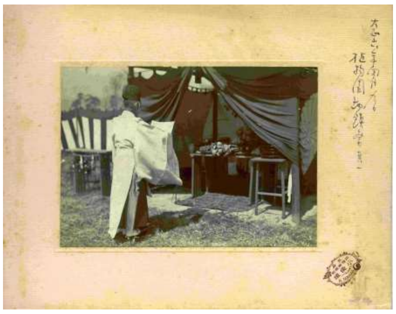

写真 1　地鎮祭

北大路通りから北へ進み、植物園のケヤキ並木に向かって右手(東)には、洛北中学・高校までほぼ一直線の道路が走り、左手(西)は 20m ほど先の賀茂川で行き止まる。この続きに「中賀茂橋」が架かっていた。

1923(T12)年 10 月 21 日、市電烏丸線が「中賀茂橋西詰(通称、植物園前)」まで延伸。同年 11 月 10 日、『大典記念京都植物園』として竣工、翌 1924(T13)年 1 月 1 日、大人五銭、子ども二銭の入園料で、一般有料開園にこぎつけた。竣工の二十日前、市電が植物園前(中賀茂橋西詰め)まで伸びたことは、京都市民(府民)の植物園に対する大きな期待の表れにほかならない。(竣工の五十日前、1923(T12)年 9 月 1 日、関東大震災)開園 10 年にもならない 1934（S9）年 9 月 21 日、室戸台風襲来(写真 2)。

写真 2 室戸台風被害

「花と緑の記録　駒敏郎　美也古豆本　第七輯　昭和 54 年」によれば、「植物園では、木という木が恐ろしいうなりをあげて身をよじっていた。……ひときわすさまじく吹いたと思う瞬間、目の前がさっと明るくなった。道路(※注:正門から北への道)の東側の樹木がいっせいに倒れてしまったのだ。……台風一過後の植物園は、まさにさんたんたるありさまだった。……ヒマラヤシーダーの並木は根こそぎ倒された。要するに立っている木が珍しいほどで、数千本の木が倒れた植物園は、正門のところから園の向こうが見通せるほどだったという。」

翌 1935（S10）年 6 月に 28,29 日の豪雨は洪水となり、市内の 59 か所の橋梁が流出するという大災害(京都大水害)が発生(写真 3)、「中賀茂橋」も流出し、賀茂川からオーバーフローした水は園内に流入し、植物園は二年連続の大きな自然災害に見舞われた。

写真 3 京都大水害・園内流入

2　83 年後、再び二年連続の自然災害

台風は毎年発生するし近畿地方にもやってくるもの、と理解してはいるが、天気予報で気になるのがその進路。植物園の南～東をとおるのか、西～北をとおるのか。

今年 95 年目の植物園、約 100 年前の当地は賀茂川の河川敷。樹木を植えるには土がなく、もっこと箱車での土運びが毎日のように続いた、との記述がある(「花と緑の記録」)。土壌層は薄く、本来樹木が育つ良い環境ではなかったが、先達たちの苦労・努力の結果、世界のいろいろな樹木を植栽。人間が植えた植物は、人間が面倒を見続けるとうまく育っていく。その原則をあっという間に覆すのが、台風だ。

2017(H29)年 10 月 22～23 日、台風 21 号は植物園の南～東を通過した。強風は北から南に吹き荒れ、園内の 100 本を超える大木が倒伏。倒れた方向は、南。倒れた木の 7 割は根返りで、直根がなく側根も貧弱、地上部の重量を地下部の根系で支えられず、強風により根がブチブチとちぎれ、倒れた。私も現職のころ、台風襲来には何度もヒヤヒヤし、夜中に京都を通過するとの予報が出たときは二度、泊まり込んだことがあった。かなりひどい被害に愕然とした経験もしたが、これほどの激しい状況はなかった（写真４）。

写真４　2017 年　台風 21 号被害

2018(H30)年 9 月 4 日、台風 21 号は植物園の西～北を通過した。すさまじい強風が南から北に吹き荒れ、園内の 200 本を超える大木が大きな被害を受けた（写真５）。倒れた方向は北。前年とは全くの逆方向。

写真５　2018 年　台風 21 号被害

根返りによる倒木は前年と同じ。

二年連続の台風被害により、相当数の樹木がそれも大木が根こそぎ倒れた。年月が経過し、成長した証として保たれていた植物園内樹木の森厳性はあちこちでもろくも崩れ、あちこちでギャップが生じ、明るい場所が一挙に増えた。自然の森林の場合、台

> 風などによってできたギャップを通過した太陽光が森林の地表に届くと、それは埋土(まいど)種子(しゅし)の新たな発生を誘引し、森林の若返り・森林の更新へと続くが、これは自然の摂理と言える。一方植物園の場合、生存競争の結果そこに生き残ったのではなく、人間が、意味を持たせてそこに植えた樹木、生存価値を有した樹木の人工植栽である。これ故に、寿命を全うするまでの予期せぬ消滅は、園としてはとまどうばかりだ。

京都府立植物園は、世の中の社会的状況、経済的状況がいかように変わろうとも、常に凛とした存在−生きた植物の博物館−でなければならない。

二年連続の自然災害に打ちひしがれることなく、職員は動員態勢で懸命に復旧に取り組んでおられる。ボランティアグループなからぎの会はじめ植物園協力会の応援、造園業者の対応も見逃せない。
みんなの思いは同じ、どんなときでも植物園は凛とした存在であり続けてほしい。

厳しい現実の姿を、今一度みなさんにも見ていただきたい思いで、したためました。